

行つきて見れ共みえずもちの坂たゞ藁靴に足をくほせてすりこばち坂といへる所にて又
俳諧歌をよみて人に見せ侍りける、

ひだるさに宿急ぐとや思らん路より名のるすりこばち坂はなれ山といへる山有誠に續き
なる尾上もみえ侍らねば、

朝まだき旅立さとのをちかたに其名もしるきはなれ山哉中半澤といへる所にやどりて
發句

水なかば澤べをわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て是彼歌よみ連歌など言捨けるに、

吾妻路の霞の關にとしこえば我也都に立ぞかへらん

都にといそぐ我をばよもとめじ霞の關も春を待らむ

此關をこえ過て戀が窪といへる所にて、

朽はてぬ名のみ残れる戀がくぼ今はたとふも契ならずや中むねをかといへる所を通り

侍けるに夕の煙を見て、

夕けぶりあらそふ暮を見せてけりわが家々のむね岡の宿堀兼の井見にまかりてよめる今

は高井戸といふ、

俯ぞ語るに残るむさしのやほりかねの井に水はなけれど

昔たれ心づくしの名をとめて水なき野べを堀かねのゐぞやせの里はやがて此續きにて侍

り、

里人のやせといふ名や堀兼の井に水なきをわびて住らんこれよりいるま川にまかりてよ

める、